埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

An Examination of Components and Relevant Factors of the Attitude about the Sound-environment in Kindergartens and Nursery Schools

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松嵜, 洋子, 吉永, 早苗, 岡本, 拡子, 無藤, 隆, 新開, よしみ メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/600

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

保育現場の音環境に関する意識の構成要素と関連要因

An Examination of Components and Relevant Factors of the Attitude about the Sound -environment in Kindergartens and Nursery Schools

松嵜洋子・吉永早苗・岡本拡子
無藤隆・新開よしみ
MATSZAKI, Yoko YOSHINAGA, Sanae OKAMOTO, Hiroko
MUTO, Takashi SHINNKAI, Yoshimi

問題と目的

1．保育現場における音環境の現状

近年、保育者が保育の専門性向上に向けてさまざまな実践の取り組みが行われており（本吉・無藤，2004；戸田，2004など）、保育環境に対する意識が高くなってきている（無藤，2009；小川，2010など）。15年前に比べて子どもが家の外にいる時間は、幼稚園児が平均39分、保育園児は平均55分も増加しており（Benesse次世代研究所，2010）、幼稚園や保育所で過ごす時間は長くなっていることから、園環境はますます重大になっている。

しかし、さまざまな環境の中で音に関する環境は目に見えず、あまり意識されているとはいえない。志村（1998）の研究によると、「日常の保育において一斉活動が行われない場合で70～80dB、音楽を伴う活動（歌･体操･演奏など）や走り回るなどの活発な遊びが行われる場合では、90～100dBに達するほど大きいものであった」という。一般的には80dBは交通量の多い道路程度、90～100 dBが電車のガード下程度の騒音に相当するといわれている。

そのため、常に騒音ともいえる音環境の中にいる子どもの音に対する感覚は鈍化していることが伺える（岡本，2009）。また、子どもだけでなく、それぞれの園がおかれた環境はあまり変化することがないので、保育者においてもその環境に対して敏感でなくなっているのであろう。子どもは本来にぎやかでうるさいものだという考えも根強くあり、大きな声でどなるように歌うことが「元気よく」歌うことであると認識している現場があることも否定できない。

2．子どもにとって望ましい音環境のあり方

無藤（2009）によると､音は「届く音」「包む音」「返る音」の３つに分類できるという。「届く音」は相手に届いたり、相手から自分に届くなどある地点から別の地点に進む音である。それに対して､「包む音」はコンサートホールなどで経験する空間に音が充満する四方八方から聞こえてくるような音である。「返る音」は、音が何かに当たりはね返ってくる音であり、歩いた音など心地よさも含め

キーワード：音環境・保育・経験年数
Key words：Sound –environment, Child Care and Education, the Years of Experience

た音感覚が関係していると考えられる。

幼稚園教育要領（2008）の中でも「幼児が様々な人やものとのかかわりを通して、多様な体験をし、・・・」（第３章１(4)）と述べられている。さまざまな環境と同様、音に関する環境に対しても多様な環境を構成し、子どもの主体的な活動を保障することが望ましい。

これは、自ら音や音楽を産出するだけでなく、耳を澄ませて聞くという聞くことの大切さや、静けさを感じ取ることである。そのためには、自然音や生活音に気づいたり、五感を働かせる中での聴く行為を意識すること（吉永ら，2004）や、様々な音への気づきを促す配慮をしたり､音環境を精査すること（岡本，2009）が必要となる。

自分の出している音や周りにある音に対して注意を向けることが可能になると、コミュニケーションにおける微細なニュアンスを感じ取ることや、物事に集中して取り組むことにつながっていく。

３．音環境に対する意識

音環境はこれまで述べてきたように保育内容や保育環境の影響が大きい。しかし、それだけでなくどのような音環境が園には見られるか、どのような音環境を構成するかなどの音に対する保育者の意識が子どもの音に対する感受性に影響を与えることになる。同じ環境や保育の取り組みをしているとしても、保育者の意識によって子どものとらえ方や行動や異なるのであろう。音環境の構成する要因を明らかにすることにより意識を高めることが、子どもを取り巻く保育場面における音環境向上への取り組みにつながると考えられる。

これらの問題意識から、本研究では保育場面における音環境の要因を、音環境に対する保育者の意識に注目して検討する。

本研究の目的は、以下の２つである。

（１）子どもにとって望ましい音環境を構成し、それらを保育にいかしていくために、音環境を構成する要素を検討する。音環境の構成要素を明らかにすることにより、保育者が音環境について意識して保育したり、自己の保育を省察し評価するための指標とすることができる。抽出された構成要素の園の保育者の意識を検討する。

（２）保育者の経験年数と音環境の意識要因との関連を明らかにする。保育経験を積み重ねることにより 熟達することがこれまでの研究からわかっているが（高濱，2000)、音環境の意識や音環境の構成に関して、保育経験年数が影響を与えているか否かについて吟味する。

方　法

１．調査対象と実施方法

東京・千葉・群馬・大阪・広島・佐賀・熊本の公立、国立大学法人立、及び、私立の幼稚園（68園）・保育所（52園）・認定子ども園（１園）に勤務する保育者を対象とした。公立は自治体の担当部署を通して、それ以外はそれぞれの園を通して調査用紙の配布・回収を行った。回答はすべて無記名で行い、回収の有無や内容について園に識別できないようにした。調査実施期間は、2009年10月～12月であり、750部回答が得られた。

２．質問紙の内容

試行調査（2008）の42項目の試行結果から答えにくい等の指摘があった項目を精査し、改定版「保育における音環境チェックリスト」

を作成した。

改訂版のチェックリストは、「１．保育者が把握している物理的・空間的環境」「２．保育者が行う物理的・空間的環境構成」「３.人的環境としての保育者のあり方」「４．音や音楽に関わる保育活動」「５.子どもの様子」各８項目の全40項目で構成した。

３．調査対象者の属性

回答者の属性を表１に示す。保育経験年数は、平均16.9年（SD11.57）であり、最も多かったのは２年（回答のあった725名中40名）であった。

また、現在勤務している施設は、公立保育所（457名）、私立保育所（28名）、公立幼稚園（177名）、私立幼稚園（52名）、認定こども園（11名）だった（表２）。本研究では、幼保や公立・私立の差異はみられず、公立保育所、公立保育園に所属する対象者が他の所属に比べて多いため、園種別による分析は行わなかった。

４．分析方法

回収されたうち、質問項目が未記入だった分を除いた735部を分析対象とした。各質問項目は、４段階で 回答を求め、「そうしている」を４点,「時々」３点,「たまに」２点,「そうしていない」1点として、分析を行った。本研究における分析には、SPSS ver.19.0を使用した。

結　果

１．音環境の尺度作成

質問項目の中で、平均が４点満点中3.5点以上であった項目（10項目）及び、「音楽の専門家の指導による保育活動がある」「集団での音楽活動（リトミックや合奏など）がある」「歌やリズムが含まれる遊び（わらべうたや手遊びなど）を行っている」の音楽に関する園での保育に関する３項目を除いて、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。固有値と解釈可能性を考慮して４因子を抽出した。その結果から、共通性が低かった６項目を削除して再度因子分析を行い、最終的に19項目を採用した。４因子における因子寄与率は、58.18％である。各因子における項目ごとの負荷量と因子間相関を表３に示す。

第Ⅰ因子は、「子どもは，友だちや保育者の発する音，声，音楽に興味をもち，自ら関わ

表１．男女別人数

	公立保育所	私立保育所	公立幼稚園	私立幼稚園	認定こども園	合計
男性	13	4	8	3	0	28
女性	448	24	171	53	11	707
合計	461	28	179	56	11	735

表２．園種別の保育経験ごとの人数

	公立保育所	私立保育所	公立幼稚園	私立幼稚園	認定こども園	合計
5年未満	84	21	55	23	2	185
5－10年未満	46	4	28	14	2	94
10－15年未満	34	3	19	8	1	65
16年以上	293	0	75	7	6	381
合計	457	28	177	52	11	725

表３．チェックリストの因子分析結果

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子
第Ⅰ因子．音への関わり				
5）-35子どもは，友だちや保育者の発する音，声，音楽に興味をもち，自ら関わろうとしている	**.857**	-.067	.000	-.013
5）-34子どもは，自然の中の様々な音に興味をもち，自ら関わろうとしている	**.843**	-.021	.057	-.048
5）-33子どもは，生活の中にある様々な音，声，音楽に興味をもち，自ら関わろうとしている	**.788**	.013	.002	.023
5）-36子どもたちはあそびの中で，即興的に歌うことを楽しんでいる	**.559**	.153	-.026	-.039
第Ⅱ因子．音楽活動への接触				
4）-30集団での音楽活動（歌や合奏など）を発表する機会がある	-.340	**.696**	.138	.054
5）-40子どもは，文化，芸術としての音や音楽に興味をもち，自ら関わろうとしている	.260	**.648**	-.064	.042
4）-32子どもが，文化，芸術的な音楽や伝統芸能（生の演奏，お囃子，和太鼓など）にふれられる機会がある	.016	**.643**	-.140	.173
5）-39子どもは，身近な楽器や音の出る素材の音色や音の違いに興味をもち，自ら関わろうとしている	.295	**.616**	.019	-.006
5)-38子どもは，様々な素材を用いて，一人でまたは子ども同士で関わりながら，音作り，音楽作りを楽しんでいる。	.292	**.591**	-.024	.004
4）-28子どもが，身近な楽器や音の出る素材に自ら関わり，親しむような保育活動がある	-.039	**.590**	.326	-.089
第Ⅲ因子．音環境の構成				
2）-10保育者は，子どもが生活の中にある様々な音に注意を向けるような環境を整えている	.029	-.020	**.814**	.003
2）-11保育者は，子どもが自然の中で様々な音に気づくような環境を整えている	.079	-.026	**.782**	.035
2）-12保育者は，子どもが自分・友だち・保育者の発する音，声，音楽に注意を向けられるような環境を整えている	-.001	.048	**.721**	-.051
2）-13保育者は，子どもが身近な楽器や音の出る素材の音色や音の違いに気づくような環境を整えている	-.133	.304	**.712**	-.061
第Ⅳ因子．環境音への気づき				
1）-5保育者は，園にあるモノ（机や椅子など）が発する音の大きさや質に気づいている	-.071	.078	-.052	**.902**
1）-6保育者は，園にある遊具（積み木やブロックなど）が発する音の大きさや質に気づいている	-.027	.060	-.034	**.877**
1）-1保育者は園の中で，音がよく響く場所とあまり響かない場所を把握している	-.063	.227	-.111	**.644**
1）-3保育者は，子どもとの生活の中にある様々な音に気づいている	.110	-.133	.329	**.486**
1）-4保育者は，子どもが日常的にふれる自然の中の，様々な音に気づいている	.142	-.257	.361	**.458**

因子間相関	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
因子Ⅰ	.397	.446	.331
因子Ⅱ		.297	.113
因子Ⅲ			.505

ろうとしている」「子どもは,自然の中の様々な音に興味をもち,自ら関わろうとしている」など子どものさまざまな音に対するかかわりを反映していると考えられるため、＜音へのかかわり＞の因子とした（４項目)。第Ⅱ因子は､「集団での音楽活動（歌や合奏など）を発表する機会がある」「子どもが，文化，芸術的な音楽や伝統芸能（生の演奏，お囃子,和太鼓など）にふれられる機会がある」など子ども自身が音楽を作ったり、聞いたりする音環境と考えられるため、＜音楽活動への接触＞の因子とした(６項目)。第Ⅲ因子は､「保育者は，子どもが生活の中にある様々な音に注意を向けるような環境を整えている」「保育者は，子どもが身近な楽器や音の出る素材の音色や音の違いに気づくような環境を整えている」など、保育者が子どもに対して望ましいと考えられる音環境の構成に関連していると考えられるため、＜音環境の構成＞の因子とした（４項目)。第Ⅳ因子は、「保育者は,園にあるモノ（机や椅子など）が発する音の大きさや質に気づいている」「保育者は園の中で，音がよく響く場所とあまり響かない場所を把握している」など保育者が保育環境の中のある様々な音への認識であると解釈されるため、＜環境音への気づき＞の因子とした(５項目)。

それぞれの因子の信頼性係数(Standardized Cronbach's α）は、＜音への関わり＞.786、＜音楽活動への接触＞.779、＜音環境の構成＞.796、＜環境音への気づき＞.784であった。おおむね高い信頼性が得られている。

各因子に属する項目得点の項目平均を算出し、合成尺度得点とした。各尺度の尺度得点の平均値は次の通りである。＜音への関わり＞3.23、＜音楽活動への接触＞2.59、＜音環境の構成＞3.09、＜環境音への気づき＞2.71。

２．音環境の意識に影響を与える要因の関連

前節で抽出された音環境の構成要素と、音環境に対する意識に影響を与える要因の関連を検討した。本研究では、保育経験年数と、音楽に関する園の保育を要因とする。

保育経験年数は、回答者の経験年数により「５年未満」「5-10年未満」「10-15年未満」「16年以上」の４群に分けた。

本研究では、質問項目の中で分析から除外した＜専門家による指導＞、＜集団による音楽活動（リトミックや合奏など）＞、＜歌やリズムが含まれる遊び（わらべうたや手遊びなど）＞の３項目を、音楽に関する園の保育として定義した。この３つの実施状況は､「どれもなし」が19名､「＜専門家指導＞のみ」が３名､「＜集団音楽活動＞のみ」７名､「＜集団音楽活動＞と＜専門家指導＞」４名､「＜歌やリズム遊び＞のみ」190名、「＜歌やリズム遊び＞と＜専門家指導＞」18名､「＜歌やリズム遊び＞と＜集団音楽活動＞」336名、「全て実施」160名だった。この7つのグループの中で、実施人数の少ない群を除外した上位３つのグループ（「＜歌やリズム遊び＞のみ」「＜歌やリズム遊び＞と＜集団音楽活動＞」「全て実施」）を取り上げた。

これらの音や音楽に関する保育内容（３群)、及び、保育経験年数群（４群）の平均値と標準偏差を表4に示す。2要因の分散分析を行った結果、因子によって異なる傾向が見られた。

第Ⅰ因子＜音へのかかわり＞は、モデル全体ではF(11,662)=4.586であり、0.1％水準で有意であることが確認された。経験年数の主

表４．保育内容と経験年数ごとの平均値および標準偏差

			音への関わり	音楽活動への接触	音環境の構成	環境音への気づき
歌やリズム遊びのみ	5年未満	M	3.04	2.11	2.69	2.41
		SD	0.71	0.47	0.58	0.51
	5－10年未満	M	3.08	2.16	2.68	2.48
		SD	0.56	0.49	0.56	0.38
	10－15年未満	M	3.05	2.12	3.01	2.73
		SD	0.47	0.49	0.49	0.36
	16年以上	M	3.01	2.11	2.92	2.73
		SD	0.70	0.49	0.66	0.43
	全体	M	3.04	2.12	2.81	2.58
		SD	0.66	0.48	0.61	0.47
歌やリズム遊びと、集団音楽活動	5年未満	M	3.35	2.63	2.99	2.51
		SD	0.60	0.57	0.57	0.47
	5－10年未満	M	3.21	2.63	3.12	2.64
		SD	0.44	0.47	0.59	0.46
	10－15年未満	M	3.35	2.7	3.25	2.77
		SD	0.55	0.57	6.12	0.43
	16年以上	M	3.27	2.7	3.26	2.86
		SD	0.54	0.58	0.52	0.43
	全体	M	3.29	2.67	3.17	2.74
		SD	0.54	0.57	0.56	0.47
全て実施	5年未満	M	3.33	3.02	2.93	2.51
		SD	0.47	0.63	0.6	0.36
	5－10年未満	M	3.36	2.97	3.05	2.56
		SD	0.63	0.56	0.47	0.4
	10－15年未満	M	3.58	3.2	3.52	2.91
		SD	0.51	0.79	0.58	0.3
	16年以上	M	3.47	3.1	3.4	2.94
		SD	0.54	0.58	0.48	0.37
	全体	M	3.45	3.1	3.32	2.85
		SD	0.54	0.6	0.53	0.4
全体	5年未満	M	3.23	2.49	2.87	2.47
		SD	0.64	0.63	0.59	0.47
	5－10年未満	M	3.18	2.5	2.94	2.57
		SD	0.52	0.56	0.59	0.42
	10－15年未満	M	3.29	2.6	3.22	2.79
		SD	0.54	0.72	0.59	0.37
	16年以上	M	3.28	2.71	3.24	2.86
		SD	0.59	0.6	0.57	0.41
	全体	M	3.26	2.62	3.11	2.72
		SD	0.59	0.66	0.6	0.46

効果はなく、保育内容の主効果のみがみられた（$F(2,662)=13.152$, $p<.001$）。「＜歌やリズム遊び＞のみ」よりも「＜歌やリズム遊び＞と＜集団音楽活動＞」の方が平均値は高く、「全て実施」はさらに高く、５％水準で有意であった。交互作用はなかった。

第Ⅱ因子＜音楽活動への接触＞は、第Ⅰ因子と同様の傾向が見られた。モデル全体では

F(11,662)=25.148であり、0.1％水準で有意であることが確認された。経験年数の主効果はなく、保育内容の主効果のみがみられた（F(2,662)=79.994, p<.001)。「＜歌やリズム遊び＞のみ」よりも「＜歌やリズム遊び＞と＜集団音楽活動＞」の方が、平均値は高く、「全て実施」はさらに高く（表４)、0.1％水準で有意であった。「＜歌やリズム遊び＞のみ」よりも「＜歌やリズム遊び＞と＜集団音楽活動＞」の方が平均値は高く、「全て実施」はさらに高く、５％水準で有意であった。交互作用はなかった。

第Ⅲ因子＜音環境の構成＞は、モデル全体ではF(11,662)=11.298であり、0.1％水準で有意であることが確認された。保育経験年数(F(3,662) =13.280, p<.001)、保育内容 (F (2,662) =18.926, p<.001)で主効果がみられた。「＜歌やリズム遊び＞のみ」よりも「＜歌やリズム遊び＞と＜集団音楽活動＞」の方が平均値は高く、さらに「全て実施」は高く、５％水準で有意であった。「５年未満」と「5-10年未満」、「10-15年未満」と「16年以上」間に差はなかったが、「５年未満」「5-10年未満」と、「10-15年未満」「16年以上」には５％の有意差がみられた。

第Ⅳ因子＜環境音への気づき＞は、モデル全体ではF(11,662)=11.402であり、0.1％水準で有意であることが確認された。保育経験年数（F(3,662)=26.284, p<.001)、保育内容（F(2,662)=3.664, p<.05）で主効果がみられた。「＜歌やリズム遊び＞のみ」よりも、「＜歌やリズム遊び＞と＜集団音楽活動＞」、「全て実施」の方が平均値は高く５％水準で有意な差が見られたが、「＜歌やリズム遊び＞と＜集団音楽活動＞」と「全て実施」に差はなかった。経験年数では、「５年未満」「5-10年未満」に差は見られなかったが、この２群と「10-15年未満」、「16年以上」にはそれぞれ５％水準での有意差がみられた。

次に、経験年数による音環境の意識を検討した（表５)。

表５．音環境構成要因別の保育経験年数群ごとの比較

第Ⅱ因子．音楽活動への接触

	5年未満	5－10年未満	10－15年未満	16年以上
5年未満				＊＊
5-10年未満				＊＊
10-15年未満				
16年以上				

第Ⅲ因子．音環境の構成

	5年未満	5－10年未満	10－15年未満	16年以上
5年未満			＊＊	＊＊
5-10年未満				＊＊
10-15年未満				
16年以上				

第Ⅳ因子．環境音への気づき

	5年未満	5－10年未満	10－15年未満	16年以上
5年未満			＊＊	＊＊
5-10年未満				＊＊
10-15年未満				
16年以上				

＊＊　p<.05

＜音への関わり＞については、保育経験年数による差異はみられなかったが、他の３要因については差がみられた。＜音楽活動への接触＞は、F(3,721)=6.956(p＜.01)、＜音環境の構成＞は、F(3,721)=19.794(p＜.01)、＜環境音への気づき＞は、F(3,721)=35.507（p＜.01）だった。

さらに＜音楽活動への接触＞では、「５年未満」「5-10年未満」と「16年以上」で差がみられた（p＜.01)。＜音環境の構成＞と＜環境音への気づき＞は「５年未満」と「10-15年未満」「16年以上」の間で有意差がみられ

た（p<.01）。

考　察

1．音環境の構成要因

本研究では、保育における音環境についての保育者の意識を明らかにするために、構成要因を抽出した。その結果、＜音への関わり＞＜音楽活動への接触＞＜音環境の構成＞＜環境音への気づき＞の４つの要因が見いだされた。この中で、＜音への関わり＞＜音楽活動への接触＞の２つは子どもの側の要因であり、＜音環境の構成＞＜環境音への気づき＞の２つは保育者側の要因である。

＜音への関わり＞は、子どもが友達や保育者などの人的環境や、自然や生活、遊びなど物理的環境の中の音に関わる項目であり、４つの構成要因の中で最も平均値が高かった。保育者は、子どもが直接関わる環境についての意識は高いことが見いだされた。

＜音楽活動への接触＞は、子どもが集団での音楽活動や、楽器や音の出る素材の音色や音について関わったり、文化芸術的音楽や伝統芸能への接触に関する項目であり、４つの要因の中では最も低かった。実際には保育の中で子どもたちは自発的に歌を歌ったり、音を作り出して遊んでいることは少なくないが、それに対して楽器を子どもの身近におくなどの配慮を意識して行っている保育者ばかりではないと解釈することができる。また、文化芸術的音楽や伝統芸能への接触は、個々の保育者の意識というよりも園の方針や保育行事が反映されるので、他の要因に比べて、低くなったと考えられる。

＜音環境の構成＞は、保育者が保育の中の友達や保育者、生活や自然などの音環境について構成している意識の項目である。＜環境音への気づき＞は保育者の環境音への気づきに関する項目であり、園の環境そのものについての意識はあまり高くないことが見いだされた。

これらの４要因の因子間相関は、＜音への関わり＞と＜音環境の構成＞が.446、＜音環境の構成＞と＜環境音への気づき＞が.505と高かった（表３）。保育者は、保育の中で音を含む環境を構成するという意識が強いため、構成した環境と子どもの行動としての音への関わりが高くなっていると考えられる。また、保育者がおこなう環境構成について意識の高低と、構成しない、あるいは、構成することができない環境音についての意識は関連しているようだ。

2．保育経験年数と音環境との関連

子どもの直接的に音への関わりに関する要因については、保育経験年数にかかわらず意識が高かった。しかし、子どもが行う音楽活動についての意識や保育者が構成する音環境や保育者の環境音への気づきの項目は、保育経験年数が5年未満の保育者よりも経験年数の長い保育者の方が高かった。

高濱の研究（2000，2001）によると、幼児と指導についての知識は、保育経験が初心者（２－４年）より中堅者（5－10年）や経験者（11年以上）の方が多かった。さらに、熟達化に伴い豊富な構造化された知識を持つことが見いだされている。経験年数が長い方が、子どもの音楽活動や、保育の中での音環境について意識することができるようになることから、知識量の増加や構造化は音環境についてもあてはまると考えられる。初心者にとって意識することが困難な音環境の各要素を、保育経験が長い保育者は次第に分析的にとら

えることが可能になり、意識的に子どもと関わったり、音環境を構成することができるようになるのだろう。

3．音楽に関する園の保育と音環境との関連

本研究においては、厳密な定義を避けて、＜集団による音楽活動（リトミックや合奏など）＞＜歌やリズムが含まれる遊び（わらべうたや手遊びなど）＞を取り上げて音や音楽にかかわる保育とした。さらに、和太鼓や鼓笛隊などを実施しているところは専門家の指導を行っているところが多いので、＜専門家による指導＞を加えて、この３つを音楽に関する園の保育とした。これらは、音楽に関する園の方針として行われていることである。

保育の中でわらべうたは、音楽教育としての目的を明確に持って導入されている場合と、遊び歌として社会性を育むことをねらいして導入されている場合とがある。わらべうたについて小島（2009）は、「日本語を母語とする子どもたちによって口伝えに歌い継がれてきた遊び歌」と定義し、「その旋律の音組織は日本の音階を基とするため、童謡や唱歌は含まないこと」、「遊び歌であることから、言葉と動きを伴っていることを前提としている」と述べている。しかしながら、学生に「わらべうた」と問うた時、『大きな栗の木の下で』、『きらきら星』など、動きを伴う童謡が多く挙げられる。保育現場における「わらべうた」の用語としての混乱も少なくはなく、本研究においてもその問題は危惧される。

リトミックとは、「音楽と聴覚および身体運動との内的関連の調和」を重視したダルクローズ（Dalcroze, E.J. 1865-1950）によって開発された独創的なプログラムである。それは、子どもたちが身体運動をとおして、音楽のあらゆる要素（リズム・メロディー・ダイナミクス・ハーモニー・形式等）の知覚・表現・理解を発達させていくことを目指したものである。音楽と身体表現の融合としてのリトミックは、心的なイメージを作り出すこと＝内的聴取力（inner hearing）の育成によって実現するが、保育現場において、リトミックの用語の理解が十分であるとは言い難い。

このように現場においては用語の理解が一様ではないため、本研究では、先に述べた３つを、音楽に関する園の保育とした。

本研究では、専門家による指導や、リトミックや合奏などの集団での音楽活動を行っている対象者が少なく、わらべうたや手遊びなどの歌やリズム遊びを行っていると答えた対象者が多かった。この3つの保育の差異を検討することができなかったため、「＜歌やリズム遊び＞のみ」「＜歌やリズム遊び＞と＜集団音楽活動＞」「全て実施」の３群について検討した。

その結果、４つの要因の全てが「＜歌やリズム遊び＞のみ」の平均値が最も低く、次に「＜歌やリズム遊び＞と＜集団音楽活動＞」であり、最も高かったのは「全て実施」のグループであった。様々な取り組みを実施しているところの保育者は、保育の中で音や音楽に接する機会も多いため、取り組みを行っていない保育者よりも意識が高いと解釈することができる。

しかし、取り組みの種類や内容、実施回数や時間などの方法については今回調査していないので、今後さらに詳細な検討を行うことが必要である。

今後の課題

本研究の結果、音環境には４つの構成要因

があることが明らかになった。さらに保育経験年数が多い保育者の方が音環境についての意識が高い、音楽に関して園が様々な取り組みを行っていると答えた保育者の方が、意識が高いことが見いだされた。

今後の課題は、以下の３点である。

第一は、調査対象を検討することである。本研究では公立の保育所や幼稚園が多く、私立の保育所や幼稚園、認定こども園が少なかった。私立園より公立園の方が保育者の年齢が高いことから、本研究でも保育者の平均年齢が高かった。また、公立園が多かったため、専門家による指導や、リトミックや合奏などの集団での音楽活動を行っていると答えた対象者が少ないという結果になったと考えられる。しかし、実際には、専門家による指導や、リトミックや合奏などの集団での音楽活動を行っている園は少なくないため、この結果が全ての園や保育者に当てはまるわけではない。今後は、調査対象を検討し、私立園も含めて様々な保育内容を行っている園の保育者の意識を調査することが必要である。

第二は、質問紙の精緻化の問題である。本研究では、因子を抽出するために探索的因子分析を行ったが、今後は保育との関連を吟味するために、質問項目やフェイスシートを充実させる必要がある。園の保育として行われている音楽活動は、本研究で取り上げた３つ以外にもマーチングバンド（鼓笛隊）や、オペレッタ・ミュージカル、合唱や合奏など多くのものがある。これらをフェイスシートの質問内容として吟味し、精緻化する必要がある。

最後に、調査方法の問題である。チェックリストは意識に関する調査なので、保育の中での事実であるのか、保育者の認識であるのかを区別することが難しく、曖昧である。質問紙調査だけでなく観察やヒアリングを行い、実際に行われている保育を詳細に吟味することが必要であるだろう。

＜引用・参考文献＞

Benesse次世代研究所　2010　第4回幼児の生活アンケート速報版　ベネッセコーポレーション

小島律子　学校教育におけるわらべうたの再考―「教材」としてのわらべうたから「経験」としてのわらべうたへ―　2009　大阪教育大学紀要第Ⅴ部門　教科教育　第58巻　第１号　43-55

小川博久　2010　遊び保育論　萌文書林

松嵜洋子・岡本拡子・新開よしみ・松嵜洋子・無藤隆･吉永早苗　2010　音環境をいかした保育(2)－「望ましい音環境」のためのチェックリスト改善案－　日本発達心理学会第21回大会　ポスター発表論文集

文部科学省　2008　幼稚園教育要領

本吉圓子・無藤隆　2004　生きる力の基礎を育む保育の実践　萌文書林

無藤隆　2009　幼児教育の原則保育内容を徹底的に考える　ミネルヴァ書房

岡本拡子・無藤隆・新開よしみ・松嵜洋子・吉永早苗　2009　音･声･音楽を中心とした表現教育の構築　文部科学省科学研究費補助金研究　成果報告書　基盤研究(C)課題番号19530737

岡本拡子・新開よしみ・松嵜洋子・吉永早苗・無藤隆　2009　音環境をいかした保育－「望ましい音環境」のためのチェックリスト試案－　高崎健康福祉大学紀要第8号　49-67

志村洋子・甲斐正夫　1998　保育室の音環境を考える(1)埼玉大学紀要教育学部第47号　第１号　69-77

新開よしみ・松嵜洋子・岡本拡子・無藤　隆・吉永早苗　2010　音環境をいかした保育(４)－保育における音環境チェックリスト調査 －　日本保育学会第63回大会論文要旨集

高濱裕子　2000　保育者の熟達化プロセス：経験年

数と事例に対する対応, 発達心理学研究　第 11 号　200-211
高濱裕子　2001　保育者としての成長プロセス：幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達　風間書房
戸田雅美　2004　保育をデザインする保育における「計画」を考える　フレーベル館
吉永早苗・奥山清子・稲森義雄　2004　“子どもの音環境に関する研究（Ⅰ）－幼稚園・保育園の室内における望ましい音環境について－”、ノートルダム清心女子大学紀要第28巻第１号　55-63

謝辞

本研究をまとめるに当たり、調査にご協力下さいました幼稚園、保育所、認定こども園の先生方に深謝いたします。また、有益な助言をいただきました白梅学園大学　福丸由佳先生、小保方晶子先生に心より感謝申し上げます。

付記

本研究の一部は、日本保育学会第63回大会において発表された。本研究は平、成21年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）の助成を受けた研究の一部である（「『音環境をいかした保育』のカリキュラム開発」代表者：岡本拡子,課題番号:1610027）。